ローマ帝国の「後継者」になること

――七世紀の地中海世界とビザンツ帝国、アラブ―

小 林

功

的となった七世紀末以降、 国を滅ぼすことができなかったため、「ローマ帝国の後継者」となることができなかった。そのためビザンツ帝国との併存が確定 支配するキリスト教徒の共同体・地域=ローマ帝国」とみなすアイデンティティも再確認されていった。一方アラブもビザンツ帝 あるのか、ビザンツ帝国の人びとも徐々に理解していく。そしてアラブとの対峙が続く中で、自らを「神の加護を得ている皇帝が に理解できていなかった。だがアラブ国家が安定し、 ビザンツ帝国の手から奪われた。当初ビザンツ帝国の人びとは、アラビア半島からの侵攻者がどのような人びとであるのか、十分 (要約) 六三〇年代以降、 独自のイスラーム文明を形成していく道を選ぶことになる。 アラブがビザンツ帝国の領域への侵攻を開始し、 彼らとのさまざまな形の交渉が進むにつれて、アラブがどのような人びとで シリア・パレスティナ地域やエジプトなどが短期間に 史林 一〇二巻一号 二〇一九年一月

はじめに

に勢力を拡大させたのが、アラビア半島西部のヒジャーズ地方を拠点としたムハンマドが率いる集団であった。 パルティア〜ササン朝ペルシアは、七世紀初頭の最後の衝突によってともに大きく疲弊したが、そのような状況下で急速 ドとその支持者たちはオリエント地域やアラビア半島における一神教の伝統を受け継ぎ、古代末期に流行した終末論の影 七世紀、 地中海世界では大きな政治的変動が進展した。それまで長期にわたって対立していたローマ~ビザンツ帝国と ムハンマ

な文明と対峙することでもあった。

響をも強く受けつつ、新たな宗教的運動をはじめてい を拡大していった。そしてムハンマドが六三二年に没する前後からシリア・パレスティナ地域、そしてイラク地域への攻 た。 彼らは政治的 軍事的にも成長し、アラビア半島で着実に勢力

撃を開始する。

に成長した。 ペルシアが滅亡し、アラブは中央アジアからキレナイカ地方(現リビア東部沿岸部)にいたる地域を支配下に収める大国家 がアラブの支配下に入り、六四〇年代までにエジプトとイラクもその後を追った。そして六五一/五二年には、 この新たな勢力=アラブに、ビザンツ帝国もササン朝ペルシアも敗北を重ねた。 六三〇年代にはシリア・パレ ササン朝 スティ ナ

だが隣接する地域に自らよりもはるかに強力な国家、そして新たな文明が出現したことの影響ははかりしれない。ビザン ツ帝国にとってアラブとの対峙は、自らの生き残りをかけた戦いを意味した。そしてそれとともに、生まれつつある新た た重要な領域を失うものの、小アジアから南イタリア・シチリア島までを支配する国家として、八世紀以降も存続した。 ある。アラブ国家・イスラーム文明の出現によって、地中海世界・中近東の光景は大きく変わっていくこととなる つまり彼らは、古代地中海世界やオリエントの文明の後継者という側面も持つものの、 アーン』に代表されるような信仰体系の整備に加え、新たな貨幣や度量衡、そして法制度などを徐々に整備していった。 アラブ国家に完全に併呑されたササン朝ペルシアとは異なり、ビザンツ帝国はシリア・パレスティナやエジプトとい アラブ国家の出現は、「大国家の出現」というだけにとどまらない、大きな意味を持つものであった。 独自の文明を新たに創造したので 彼らは 『 ク ル

41

ビザンツ帝国の人びと

いて「アラビア半島からやってきた人びと」程度の知識しかなかった。

(およびキリスト教徒)も徐々に、彼らが何者であるのか理解を深めていくことになる。それは初期から繰り返して起きた

しかし時の経過とともに、

六三〇年代、最初にアラブがシリア・パレスティナ地域に侵入してきた時期には、ビザンツ帝国の人びとは侵入者に

軍事的 得られた情報や知識を蓄積し、理解・解釈していくことによってビザンツ帝国は、アラブ国家がきわめて強大な国家であ 衝突だけでなく、人びとの移動や交渉などによってももたらされていった。さまざまな機会やチャンネルを通じて

彼らと軍事的・政治的に対峙していくことの困難さを痛感していくことになる。

は異なる信仰を持つ他者が存続し、共存せざるを得ないことが、ビザンツ帝国の人びとに明らかとなっていったのである。 明確になりつつあった。換言すれば、自分たちのすぐ近くに、自分たちよりもはるかに強力な軍事力を持ち、自分たちと 教的にもビザンツ帝国あるいはキリスト教徒とは大きく異なる立場にある国家・集団であることが、彼らとの対峙の結果、 びとがどのように認識していったのか、まず分析する。そしてそれを踏まえて、自分たち゠ビザンツ帝国をどのように ゆえに本稿では、七世紀に突如現れたアラブが、自分たちとは異なる信仰を持つ人びとであることを、ビザンツ帝国の人 な意味を持ったのは当然である。だがそれは同時に、「自分たちは何者か」ということを自省することをも促しただろう。 なる信仰を持った人びとであることもまた、徐々に認識されていく。アラブが政治的・軍事的に敵対するだけでなく、宗 突如として出現した強力な他者。彼らが何者であるのか認識することが、ビザンツ帝国の人びとにとってきわめて大き アラブに対する認識の変化は、政治的・軍事的な観点でのみ起きたのではない。アラブが自分たちキリスト教徒とは異

明が姿をあらわしていく初期段階といえる。したがって本稿での分析は、アラブ国家・イスラーム文明との対峙によって 最初に述べたように、アラブは大国家を新たに形成しただけでなく、新たな文明をも創造した。七世紀中

(再)認識していったのかについても、検討していく。

ビザンツ帝国がどのように変化していったのか、その発端をかいまみる試みである

(1)

of the Islamic World, Cambridge, 1977 (以下、Hagarism と略).

S. J. Shoemaker, ""The Reign of God Has Come": Eschatology and Empire in Late Antiquity and Early Islam", *Arabica* 61–5 (2014), pp

仰が、明確な教義を持ち独自の宗教=イスラームとして整備されてい わけではない。P. Webb, Imagining the Arabs: Arab Identity and the していた上に、「アラブ人」というアイデンティティも確立していた また初期の彼らの集団にはキリスト教徒やユダヤ教徒なども多数参加 大半の期間、「ムスリム」という自意識はまだ確立していなかった。 ティナやイラクなどに侵入して国家を形成していった勢力・集団の信 くまでには、かなりの時間を要する。したがって本稿で扱う七世紀の ヒジャーズ地方を最初の拠点とし、六三〇年代以降シリア・パレス

> ラームの誕生』と略)。本稿では彼らを「アラブ」と表記するが、あ リムへ―』慶應義塾大学出版会、二〇一四年(以下、ドナー『イス ド・M・ドナー Rise of Islam, Edinburgh, 2016 くまでも便宜上の呼称である。 (後藤明監訳)『イスラームの誕生―信仰者からムス (以 下、 Webb (2016) と略); フレ

とができなかった理由の一つとして、 た」ことも挙げなければならない。 アラブの侵入・攻撃に対してビザンツ帝国が効果的な対応をとるこ 「侵入者が何者かわからなかっ

七世紀の地中海世界とビザンツ帝国、アラブ

べていく。 いて、さまざまな点で修正、あるいは再検討が必要な状況となっている。本章では、かかる新たな研究状況を踏まえて述 しておく。七世紀のこの地域の状況については近年急速に研究が進展しており、その結果従来の定説やクロノロジーに アラブがアラビア半島外への本格的な進出を開始したのは、六三○年代前半である。パレスティナ内陸部から徐 本章では議論の前提として、アラブが出現した七世紀の地中海世界・中近東地域がどのような状況にあったのか、

ビザンツ軍は六四二年にエジプトから撤退した。アラブの勢力は六四○年代前半にキレナイカ地方にまで達する③ ドン派のアレクサンドリア総主教キュロスと、アラブ軍の指揮官であったアムル・ブン・アル・アースとの協定によって、 ほぼ全域を制圧した。アラブはエジプトには、六四○年から本格的な侵入を開始する。そして六四一年一一月の、 進したアラブ軍は、六三六年のヤルムーク河畔での戦いなどを通じて、六三○年代末までにシリア・パレスティナ地域 カルケ

だが六四○年代に入ると、アラブとビザンツ帝国との戦いは膠着状態に陥った。アラブのビザンツ帝国に対する攻撃も

が々に

北

死させた。だがアラブはこの好機にもかかわらず北アフリカを征服せず、現地の住民から多額の貢納を得た後、エジプト 当時帝位を僭称していたカルタゴ総督のグレゴリオスの軍をスフェトゥラ(スベイトラ)で撃破し、グレゴリオスをも敗 散発的であった。別稿でも検討した北アフリカへの攻撃は、その一例である。アラブ軍は六四七年に北アフリカを攻撃し、

に撤退している。

ツ帝国への離反を促す工作をおこなった。 事していた軍事力を西方へ転進させるなど、十分な準備をおこなった。また別稿で分析したように、アルメニアでビザン の休戦協定を締結する。アラブはこの期間中に、地中海における大艦隊の構築や、東方でササン朝ペルシアとの戦いに従 二年)が殺されるまで、イラン高原での抵抗を続けた。そして六五一/五二年にササン朝ペルシアを滅ぼしてようやく アラブはビザンツ帝国の滅亡を目的とした軍事行動の準備を本格化させた。ビザンツ帝国とアラブは六五一年頃に三年間 ヤや六四二年のニハーヴァンドなどでアラブに大敗を喫していたが、その後もヤズドギルド三世(在位六三二―六五一/五 この時期アラブは、東方でのササン朝ペルシアとの戦いに注力していた。ササン朝ペルシアは六三八年のカーディシー

そらく六六七―六六九年におこなわれた、二回目のコンスタンティノープル攻撃であった。 ザンツ領への攻撃をおこなった。その頂点となったのが、ムアーウィヤの息子で後にカリフとなるヤジードの指揮下にお になっている。この攻撃は暴風雨によって失敗し、その後六五六年からアラブでは第一次内戦が勃発する。だがムアーウ ィヤ(在位六六一─六八○年)が単独のカリフとなると、彼は再び、ビザンツ帝国の攻略・併呑をめざして連年のようにビ た。だが近年ではアラブ軍がコンスタンティノープルをはじめて攻撃したのは六五四年だったことが広く認められるよう 二〇世紀末まで、アラブがはじめてコンスタンティノープルを本格的に攻撃したのは六七〇年代であると考えられてき

のをはじめとして、シリアに対する攻撃などもおこなわれた。ムアーウィヤが没した六八〇年以降、戦いは小康状態とな だが六七〇年代に入ると、 一転してビザンツ帝国が反撃に転じる。六七四年に小アジア南部沖でアラブ艦隊に勝利

やキリキア地方 (小アジア半島南東部)、上部メソポタミアなどを失った。そして七一七一七一八年に、三回目のコンスタ 七一五年)の治世に、ビザンツ帝国へのアラブの攻撃は再び激化した。ビザンツ帝国は七一〇年代初頭までに北アフリカ 滞するが、六九○年代以降、混乱を収拾したアブド・アル・マリク(在位六八五−七○五年)とワリード一世 おそらく六八五年に休戦協定が結ばれた。六八〇年代にはアラブで第二次内戦が起きるため、アラブの攻撃は再び停 (在位七〇五

ンティノープル攻撃がおこなわれることとなる。

- ① シリア・パレスティナ地域のアラブによる征服についてはさしあたって、W. E. Kaegi, Byzantium and the early Islamic conquests, cambridge, 1992. なお、決定的な敗北は六三六年ではなく、六三八年に起きたという見解もある。D. Woods, "Jews, Rats, and the Battle of Yarmūk", in: A. S. Lewin & P. Pellegrini (eds.), The Late Roman Army in the Near East from Diolcletian to the Arab Conquest: Proceedings of a Colloquium Held at Potenza, Acerenza and Matera, Italy (May 2005), Oxford, 2016, pp. 367–376.
- ② アラブのエジプト攻撃については W. E. Kaegi, "Egypt on the eve of the Muslim conquest", in: C. F. Petry (ed.), *The Cambridge History of Egypt vol. 1: Islamic Egypt, 640–1517*, Cambridge, 1998, pp. 34–61; Ph. Booth, "The Muslim conquest of Egypt reconsidered", *Travaux et Mémoires* 17 (2013), pp. 639–670.
- ④ 拙稿「北アフリカ」。

-) Theophanes Confessor, *Chronographia*, Leipzig 1883(以下、Theophanes い略), p. 343.
- Theophanes, p. 343.
- © P. Pourshariati, Decline and Fall of the Sasanian Empire: Sasanian-Parthian Confederacy and the Arab Conquest of I London, 2008, pp. 240–281.
- この休戦協定については、第三章で触れる
- ◎ 拙稿「首都を離れるビザンツ皇帝」と略)、○八―一二八頁(以下、拙稿「首都を離れるビザンツ皇帝」と略)、中―紛争と秩序のタペストリー―』ミネルヴァ書房、二○一五年、一一」服部良久(編)『コミュニケーションから読む中近世ヨーロッパー・ン言。
- R. W. Thomson (tr.), The Armenian History attributed to Sebeos Part I. Translation and Notes, Liverpool, 1999 (以下、Sebeos い略) ch. 50 (pp. 144–146).
-) 六七○年代にコンスタンティノーブル攻撃・包囲がおこなわれたとする従来の説には、強い疑念が呈されるようになっている。M. Jankowiak. "The First Arab Siege of Constantinople", *Travaux et Mémoires* 17 (2013), pp. 237–320.

- Antiquity and Early Islam, Liverpool, 2011, pp. 166-168 Chronicle and the Circulation of Historical Knowledge in Late Theophanes, p. 354; R. G. Hoyland (tr.), Theophilus of Edessa's
- M. Jankowiak, op. cit., p. 274
- コヴィアクは否定している。M. Jankowiak, op. cit., pp. 255-256 それより早く、ムアーウィヤの生前に休戦協定が結ばれたとする 『テオファネス年代記』の記述 (Theophanes, pp. 355-356.) を、ヤン
- 北アフリカでは六九八年にカルタゴを喪失した後、最後の拠点とな

とが示唆される。F. Montinaro, "Les premiers commerciaires byzan 年代初頭までキリキアや第四アルメニアで徴税がおこなわれていたこ 382.)、後述するゲニコス・コンメルキアリオスの印章からも、七一〇 フリカ」。小アジア東部・上部メソポタミアでは、フィリッピコス帝 いたことが『テオファネス年代記』からわかるほか (Theophanes, p っていたセプテム(現在のセウタ)を七一〇年に失った。拙稿「北ア (在位七一一一七一三年)時代に属州第四アルメニアに支配が及んで

tins", Travaux et Mémoires 17 (2013), pp. 351-538, pp. 494, 498-499

ニ 「サラケノイ」へのまなざし

サラケノイと呼ばれていた。 だ。サラケノイは、古代末期にアラビア半島やシリア・パレスティナ地域の内陸部に住んでいた人びとのことを指す呼称 対する名称として広く使用されるようになっていた。そのため、六世紀にビザンツ帝国の同盟者として現れるジャフナ家 称としても使われることがほぼ途絶し、サラケノイがシナイ半島やヒジャーズ地方北西部に居住・生活している人びとに である。より古い時期にしばしば使われていた「アラボイ(アラブ人)」という呼称は、古代末期になると自称としても他 ラブを認識することができなかった。そのためビザンツ帝国の人びとは彼らのことを「サラケノイ(サラセン人)」と呼ん (いわゆるガッサン朝)に代表される、アラビア半島北部からパレスティナ内陸部に居住していたアラブ系の集団もまた、 はじめに述べたように六三○年代には、ビザンツ帝国の人びとには「アラビア半島からやってきた侵入者」としか、ア

になっていった。例えば三七〇年代にサラミスのエピファニオスが著した『パナリオン』には、以下のような記述がある。 かった。そのためサラケノイを「アガレノイ(ハガルの子孫)」「イスマエリタイ(イシュマエルの子孫)」と同一視するよう サラケノイは聖書で言及されないので、彼らがどのような人びとであるか、古代末期の人びとには容易な定義ができな してはそのような行動や表象を一切示していない。

シリア・パレスティナ地域に侵入してきたサラケノイを、

(アブラハム) には八人の子がいたが、 神に忠実なる生活をしていた父の意向によって、そして父に示された神の約束によっ

て、イサクだけが後継者となった。

て、そこからアガレノイとイスマエリタイの諸部族―彼らは今ではサラケノイと呼ばれている―が誕生した。⑤ 述したように、彼の名はイシュマエルである)は、やってきて荒野の中にあるパランという地を創建した。彼には一二人の子が 福なるアラビア(アラビア・フェリクス)という地に散らばった―ゼンブラン(ジムラン)、イエザン(ヨクシャン)、イエスボク (イシュバク)、ソーウェ(シュア)、エマデム(メダン)、そしてマディアム(ミディアン)である―。そして「女奴隷の子」(上 (アブラハムは)彼より先に、若い女奴隷のハガルからイシュマエルをもうけ、またケトラが彼に六人の子を産んだ。

また同時 :期にはヒエロニムスも、サラケノイとアガレノイ、イスマエリタイを同一視している。 ®

祝福することで、自らが「キリスト教徒の守護者」であることを明確に主張した。しかしヘラクレイオスは、アラブに対 略・破壊しているし、ササン朝ペルシアに奪われてイェルサレムから持ち去られていた「聖なる十字架」の帰還を盛大に た。そして実際に彼は、ペルシア領に侵入するとゾロアスター教の聖地であるシーズ(タクト・イ・スライマーン)を攻⑦ 唆される。ヘラクレイオス帝は、ササン朝ペルシアとの戦いがキリスト教徒の敵に対する聖なる戦いであることを強調 宗教的特性はあまり重視されなかった。それは、アラブに対するヘラクレイオス(在位六一○一六四一年)の対応からも示 にキリスト教を受容・信仰しているサラケノイも数多くいた。したがってアラブの拡大の初期段階において、彼らの持つ がハガルとイシュマエルの子孫である、という以上の強い宗教的な含意はなかった。実際古代末期にはジャフナ家のよう ただこれらの議論は、サラケノイがどのような人びとであるのか、聖書の記述に沿うように定義しただけであり、

(47)

ビザンツ帝国の人びとはどのような存在として認識したのだ

語などさまざまな言語による同時代資料を広く調査した上でおこなわれている。本章では特にホイランドの分析を参考に ろうか。そのことについて伝えてくれる同時代の資料は少ないが、既にケーギやホイランドによって調査・検討がおこなの。 われている。特にホイランドの研究は、ギリシア語、ラテン語による記述だけでなく、シリア語やコプト語、アルメニア

三四年にイェルサレム総主教に就任した修道士ソフロニオスは、総主教就任時のシュノディコスで、以下のように述べて ラケノイが一定の宗教的傾向を持つことが、キリスト教徒やユダヤ教徒に認識されていなかったわけではない。例えば六 サラケノイはまず何をおいても、野蛮な侵入者に他ならなかった。しかし、ムハンマドやメディナのカリフの配下に集ま った人びとは、一神教の理念を抱き、実践する人びとであった。したがってシリア・パレスティナ地域に侵入してきたサ しつつ、六三○年代のアラブの出現期を中心に、ビザンツ帝国の人びとのアラブに対する認識を概観していく。 六三〇年代にアラブがシリア・パレスティナ地域への侵入・攻撃を開始した時期には、ビザンツ帝国の人びとにとって

不敬虔なる心根と神に反する不遜さによって、残酷かつ獣のように獰猛に、すべてを荒掠しております。 倒してその尊大さを打ち砕くことでしょう。しかしながら今や、我々の罪ゆえに彼ら(サラケノイ)は突如として我々に刃向かい 子々孫々にいたるまで帝冠をもたらし、神の平和によって守りを固め、強力な権限を渡しすべての蛮族、とりわけサラケノイを圧 うことによって神は怒りを鎮め、長年にわたって彼ら(皇帝たち)に満足して蛮族に対する大いなる勝利や戦勝を与え、 ①憐れみ深く人びとを愛しておられる神は、意志と同等の力をお持ちですが、あなた方が神に受け入れられるような祈りをおこな

ため、ベツレへムなどにキリスト教徒が赴くことが困難になっていることをソフロニオスは嘆いている。そのためソフロ 六三四年には 既に、 イエ ルサレム近郊にアラブの脅威が迫っていた。 同年のクリスマスの説教では、アラブ軍の存在 長させ、

神に対する邪な誹謗をおこなっているのです。

彼ら、

すなわち神と戦う者たち

(θεομάχοι)

は、

すべてのものを手に入れ 彼 (悪魔)

ると慢心していますが、

自分たちの指揮官である悪魔を常に心から模倣し、その虚無を手本としています―それは、

存在であるとしている。ただこの表現からは、サラケノイの宗教的傾向についてソフロニオスがどのような認識を持って ニオスはアラブがどのような集団なのか、 ア・パレスティナ地域におけるビザンツ支配は終焉を迎えようとしており、 いたのかはあまり明確ではない。むしろ、「我々(=キリスト教徒)の罪」を強調することに力点が置かれている。 ケノイを蛮族の代表(「すべての蛮族、とりわけサラケノイ」)として言及する一方で、サラケノイを「不敬虔」「神に反する」 おそらく六三七年一月におこなわれた説教の中で、ソフロニオスは以下のように語っている。この時 一定の知識を持っていたに違いない。シュノディコスでソフロニオスは、 イェルサレムもまもなく降伏することとなる。 ij É

らされていたように、 でも、より重荷となることであります―。これらは、神を憎み、復讐のごとき悪事をなすサラケノイ―我々に既に預言によって知 私の名前が異教徒によって中傷されているのだ!」と叫ぶのでしょうか―これは、我々に降りかかってきているすべての災厄の中 ださるお方であるキリストが、異教徒の(έθνικοῖς)舌によって中傷され、まったく正当にも我々に対して「おまえたちのせいで のでしょうか。なぜ、十字架が嘲笑されるのでしょうか。なぜ、すべての善をくださるお方であり、喜ばしきことをもたらしてく びとの血が絶え間なく流されているのでしょうか。なぜ、空の鳥は人びとの体を苦しめるのでしょうか。なぜ、教会が破壊される サラケノイの軍勢は我々に攻撃をしかけてくるのでしょうか。なぜ、破壊行為や略奪行為が増大しているのでしょうか。なぜ、 ②なぜ、我々にとって戦いが日常のこととなっているのでしょうか。なぜ、 収穫を奪い去り、 勝利につぐ勝利をあげ、我々に対してはさらに傲慢にふるまうようになってキリストや教会への中傷をさらに増 彼らは明らかに「荒廃をもたらす忌まわしい者」なのです―が、彼らのものではない場所に侵入し、 村落に火をかけ、 聖なる教会を焼き、 神に捧げられた修道院を荒掠し、 蛮族の侵入が繰り返されているのでしょうか。なぜ、 ローマ軍に対峙して戦

が

それでもアラブ=「異教徒」という認識が現れつつあったことは看取できる。 ているように、この説教においてソフロニオスの主たる関心はアラブの存在にはないため明確には指摘しにくいものの、 ノイが教会を破壊し、 この時点でもソフロニオスは六三四年と同様、サラケノイを蛮族と見なしている。だが同時にソフロニオスは、 十字架を嘲笑し、修道院を荒掠する「異教徒」であることをも指摘している。 ホイランドが指摘 サラケ

の教え』には、以下のような記述がある。 ただ、このような認識が一般的になっていたわけではない。六三四年頃に成立したと考えられている® 『新洗礼者ヤコブ

だ!剣や武器を装備した預言者がやってくる、なんてことがあるだろうか?』」 に現れた預言者について、…あなたは何を言ってくださいますか?』すると彼は大声で嘆きつつ私にこう言いました。『あれは偽者 た。私はシュカミナにやってくると、十分な学識のあるとある老人のところに滞在して、彼にこう言いました。『サラケノイととも 彼らは、預言者が現れてサラケノイとともにやってきて、メシアにして救世主が来臨することを知らせている、とも言っていまし りました。すると人びとがこう言っていました。『カンディダトスは殺された!我々ユダヤ人は大いなる喜びの中にいる!』そして イによって殺された時、私─アブラメスの言葉です─はカイサレイア(・マリティマ)にいたのですが、船でシュカミナに立ち去 ③私の兄弟のアブラメスが私のところに…偽預言者が現れたこと…について手紙を書いてきたのです。「カンディダトスがサラケノ

がわかる。だがあくまでも彼らは「(偽) この報告からは、「サラケノイの中に、 (偽) 預言者」に率いられた集団であり、彼らが具体的にどのような信仰を持ってい 預言者に率いられた武装集団が出現した」という認識が当時存在したこと

は考えられない。 たの かか は明確ではない。 単一の確固たる信仰を持った集団として「サラケノイ」を認識することは不可能だったろう。 実際、 初期のアラブ軍はユダヤ教徒やキリスト教徒なども合流して形成された重層的な集団 またユダヤ人の一 部が喜んでいることからも、サラケノイの信仰に対して十分な知識 が

定をめぐる交渉(六四〇年頃)についての報告も、 またニケフォロスの 『簡約歴史』が伝えている、エジプトにおけるキュロスとアムル・ブン・アル・アースとの休戦協 示唆に富む。

ト教徒にしようとした。というのもアンブロスとその軍はキュロスを信頼しており、 ④するとキュロスは皇帝(ヘラクレイオス) ―これは通行税として徴収され、皇帝に対する徴税もこれまで通りおこなわれる―を支払う協定を結ぶつもりであると報告し 皇帝の娘の一人であるアウグスタのエウドキアを彼と婚約させ、その上で聖なる水盤で洗礼を施して(彼を)キリス に、 サラケノイのフュラルコスであるアンブロス 彼を深く敬愛していたからである。 (アムル・ブン・アル・アース) に

能性も考えられる。 部などにいたアラブ系の部族長・君侯に対してビザンツ帝国が与えた称号である。つまりキュロスはアムル・ブン・ア ラルコス」と理解している。フュラルコスは六世紀にジャフナ家の君侯など、アラビア半島やシリア・パレスティナ内陸 ャフナ家などのアラブの部族連合体と共通する性格を持ち、 ル・アースを、古代末期のアラブ系諸部族の部族長と同様の存在と見なしていたことがわかる。実際初期のアラブは、 この報告で注目すべき点は二つある。 第一に、キュロスはアムル・ブン・アル・アースのことを、「サラケノイのフュ またジャフナ家との衝突からアラブの征服活動が始まった可

ン派の)キリスト教徒とすることが可能と考えている。ソフロニオスと同様、 第二にキュロ ースは、 ア ムル ・ブン・ アル ・アースや配下の軍に対して洗礼をおこなうことによって、 アラブ軍の侵攻を間近で経験し、 彼らを (カル アラブ軍 51

とも直接交渉をおこなっているキュロスであるが、彼はソフロニオスほど、アラブをキリスト教徒の敵とは見なしてい ,。キュロスはアムル・ブン・アル・アースらを、洗礼を通じてカルケドン派のキリスト教徒になる可能性の高い人びと

このような考え方は、ヘラクレイオス帝にも共通している。と考えており、彼らのことを「異端」と見なしていた可能性が高い。

⑤だが彼(ヘラクレイオス)は、キュロスを異端と呼んだ。それは、異端であり神と戦う者でありキリスト教徒への敵対を考えて いる者である、サラケノイのフュラルコスのアンブロスに、皇帝の娘を婚約させようと企んだ、という理由からだった。

仰を持っているのか、十分な情報がなかった状況下では当然のことであろう。そしてまたキュロスのように、(正統な)キ リスト教信仰に彼らを取り込むことが可能と考える者がいたことも、決して不思議ではない。 きく異なる独自の信仰を持っていたとは認識していなかったということを示すものであるが、サラケノイがどのような信 そのような考え方の萌芽はアラブの侵入のごく初期から存在していた。それは、サラケノイ=アラブがキリスト教とは大 イスラーム信仰を「異端」と見なす言説はダマスクスのヨハネスなどの後代のキリスト教徒にも受け継がれていくが、® 『新改宗者ヤコブの教え』にある、以下の記述も注目に値する。

悪魔の出現以外には、何も生じないに違いないからです。 ⑥というのも、 第四の野獣すなわちローマ帝国の後退の後には、 諸民族の混乱を別にすると、一○の角と人びとを惑わせる瀆神の

この記述は、『旧約聖書』「ダニエル書」の有名な部分を前提として書かれている。「ダニエル書」で言及される「四頭

に何らかの宗教的含意があったわけではなかった。

味する。 たがってここで第四 て認識されていることになる。 る者たちがいるのも、 近いことを当時の人びとが強く認識していたことを示す報告である③で、 もたらす忌まわ 0 獣 ②でソフロニオスが が 世界を支配する四つの しい者」 の野獣= この文脈から理解できる。そしてこのような観点に立つならば、 ŧ, この見方を前提にしている。この時期は終末論が非常に広範に影響力を持っており、® ローマ帝国を打破したアラブは、 「ダニエル書」(および 大帝国を示し、 第四 『新約聖書』「マタイによる福音書」)を援用しつつ述べてい 0 野 一獣が 終末が来る直前に現れる荒廃者と見なされてい 口 ーマ帝国を示す、 ユダヤ教徒の中にサラケノイの出 という考え方は広く通 アラブの存在は 時 用 的 してい 現を喜んでい る なものとし 終末が

が聖書で言及されるアガレノイ、イスマエリタイと同義であるという考え方は確立していたが、 は侵入者が「サラケノイ」であると認識した。サラケノイはアラビア半島やシリア・パレスティナ内陸部にいるアラブ系 を消す。 の移牧民などを指す一般的用語であったから、このような認識を持つのは当然であった。一方古代末期には、サラケノイ の理由が 以上要するに、六三〇年代にアラブがシリア・パレスティナ地域への侵入を開始した時期から、 また先述したようにソフロニオスは①で、 したがってソフロニオスも、 「我々の罪」であるならば、 サラケノイはいずれ姿を消す存在であると認識していたことが示唆され 我々=キリスト教徒が悔い改めることによって神の怒りは収まり、 サラケノイの出現の理由を「 ・我々の罪」に求めているが、 サラケノイという語自 ビザンツ帝国 サラケ サラケノイも姿 の 1 人びと 0 出 現

現した、 異なる独 侵入の初期からビザンツ帝国の人びとにある程度認識されることになる。 だが侵入してきたサラケノイは、 すぐに姿を消す集団として認識することも多かった。 自 \bar{o} 信仰を持 つ集団であるとい 神教の信仰を持ってい う認識が確立していたことを示すわけではない。 た集団であった。 だが、 そのためサラケ それは彼らがキリスト教やユダヤ教とは また、 ノノイ 彼らのことを一 の持つ宗教的 特徴 時 的に出

ビザンツ支配下の諸都市・軍など)もいた。サラケノイの信仰や宗教に対するビザンツ側の認識が漠然としているのも、こ た。さらに混沌とした状況に乗じて独自に軍事的行動や略奪行をおこなった集団(後代のアラビア語資料で「偽預言者」とさ れる人びと)もいた。そしてもちろん、ビザンツ帝国の不利を知ってメディナのカリフに寝返った集団(境域部の移牧民や、 く信仰の信者だけでなく、ユダヤ教徒やキリスト教徒などをも一定の合意のもとで重層的な連合体としてまとめあげてい ラームの信仰が確立していたわけではなかった。また、先述したようにメディナのカリフに従っていた人びとがすべて同 一の信仰を持っていたわけではない。ホイランドらが指摘するように、ムハンマドやその後継者たちは、ムハンマドの説

このような認識しか持てなかったのは、六三○年代の状況を考えると当然であった。そもそもこの時期にはまだ、

の時点では当然だった。

アラブに対しても起きると考えても不思議ではない。ビザンツ帝国と長年にわたって対立を続けてきた大帝国ササン朝ペ アラブの強大さが長続きしないという見通しをキュロスが持っていたと考えることで、その意図がより理解できる 力拡大は一時的なものであり、短期間でビザンツ帝国の支配がシリア・パレスティナ地域やエジプトに復活すると考える ラブならばなおさら、その勢いがすぐに衰えると予期することは無理もない。ビザンツ帝国の人びとがアラブの急速な勢 ルシアですら、シリア・パレスティナ地域やエジプトを支配できたのはきわめて短期間であった。姿を現したばかりのア よって両地域から一掃され、シリア・パレスティナ地域でもエジプトでもビザンツ帝国の支配が復活した。同様のことが サン朝ペルシアは六一〇年代にシリア・パレスティナ地域とエジプトを征服した。だが彼らの勢力はヘラクレイオス帝に また六三〇年代には、モレッリが指摘するようにササン朝ペルシアに対する劇的な勝利の記憶が強烈に残っていた。サ この時期にはやむを得ないことであった。④で挙げたような、キュロスとアムル・ブン・アル・アースとの交渉も、

e) G. Fisher et al., "Arabs and Christianity", in: G. Fisher (ed.), Arabs and Empires before Islam, Oxford, 2015, pp. 276-372 (되는' Fisher

al. (2013) と町), p. 368.

^{(2016),} pp. 46-49; O. Nicholson (ed.), The Oxford Dictionary

- of Late Antiquity, Oxford, 2018, pp. 115-117
- ③ ジャフナ家や関連する諸問題については、最近論文集が刊行された。 D. Genequand & Ch. J. Robin (eds.), Les Jafnids: Des rois arabes au service de Byzance, Paris, 2015.
- ④ 例えばプロコピウスは、ナスル家(いわゆるラフム朝)を「ペルシと表記している。Procopius, De bellis, 1.47.45-47.
- ⑤ Epiphanius, *Panarion*, IV (Retrieved from: http://stephanus.tlg.uci.edu/Iris/Cite? 2021:002:36706 最終閲覧日二〇一八年一一月二日); Fisher et al (2015), pp. 368-369.
- ⑥ Hieronymus, Commentarium in Ezechielem, VIII 25. なおヒエロニムスはサラケノイの語源をアプラハムの妻のサラに求め、サラケノイがサラ の子孫を(偽って)称していると考えている。cf. G. Fowden, Empire to Commonwealth: Consequences of monotheism in late antiquity, Princeton, 1993, p. 147.
- ⑦ ただしイスラームのジハードや、十字軍などの思想との差異にも留意する必要がある。cf. I. Stouraitis, "Just War' and 'Holy War' in the Middle Ages: Rethinking Theory through the Byzantine Case-Study", JÖB 62 (2012), pp. 227–264.
- ⑧ Sebeos, ch. 38 (p. 81); Theophanes, p. 308: 青木健『ゾロアスター教の興亡―サーサーン朝ペルシアからムガル帝国へ―』刀水書房、二〇〇七年、三二一―三三頁。
- (⑤) Theophanes, pp. 328-329; Nikephoros, Patriarch of Constantinople, Short History, Washington D.C., 1990 (以下, Nikephoros 心略), ch. 18 (p. 66); Sebeos, ch. 41 (pp. 90-91); Ph. Booth, Crisis of Empire: Doctrine and Dissent at the End of Late Antiquity, Berkeley, 2014 (以下, Booth (2014) 心略), pp. 155-160.

W. E. Kaegi, "Initial Byzantine Reactions to the Arab Conquest" Church History 38-2 (1969). pp. 139-149(以下、Kaegi (1969) 心密).

(10)

-)R. G. Hoyland, Seeing Islam as Others Saw it: A Survey and Evaluation of Christian, Jewish and Zoroastrian Writings on Early Islam, Princeton, 1997 (以下、Hoyland (1997) 之略).
- ドナー『イスラームの誕生』、六八―六九頁。
- 総主教就任時に、他の総主教に送付する書簡
- Sophronius, Synodica, 2. 7. 3.

(14)

13 12

- ⑤ Sophronius, Homilia in nativitatem Christi, in: H. Usener, "Weihnachtspredigt des Sophronios", Rheinisches Museum für Philologie N.F. 41 (1886), pp. 501–516, p. 507. (Retrieved from: http://stephanus.tlg.uciedu/Iris/Cite?4042017:12485 最終閲覧日□○□八年□□月□日)
- Booth (2014), pp. 242-244.
- (5) Dan. 11: 31
- ® Sophronius, *Homilia in theophania*. X. (Retrieved from: http://stephanus.tlg.uci.edu/Iris/Cite?4042.019.3336 最終閲覧日□○一八年一
- Hoyland (1997), p. 73.

月二日)

- 図 Hoyland (1997), p. 55, 59. しかしアンソニーは『新洗礼者ヤコブの教え』の成立を六七○年代と主張している。S. W. Anthony, "Muḥammad, the Keys to Paradise, and the *Doctrina Iacobi*: A Late Antique Puzzle", *Der Islam* 91-2 (2014), pp. 243-265.
- これは六三四年二月の、ダティンの戦いのことと思われる。
- Doctrina Jacobi nuper baptisati, in: G. Dagron and V. Déroche, "Juifs et Chrétiens dans l'Orient du VIIe siècle", Travaux et

56

- Mémoires 11 (1991), pp. 17-273 (以下、Doctrina Jacobi と略), V. 16
- 图 R. G. Hoyland, In God's path: The Arab Conquests and the Creation of an Islamic Empire, Oxford, 2015 (氧片, Hoyland (2015)
- (3) Nikephoros, ch. 23 (pp. 70-72).

と略), pp.58-59.

- ⑤ cf. A. S. Lewin, "Did the Roman Empire have a military strategy and were the Jafnids part of it?", in: D. Genequand & Ch. J. Robin (eds.), op. cit., pp. 155-192.
- (3) Hoyland (1997), pp. 556–558.
- 導しており、かなり融和的な立場にある。 ロスは単一エネルゲイア論の導入や非カルケドン派教会との合同を主り、単一エネルゲイア論にも厳しい姿勢を取っていたのに対し、キュの ソフロニオスがカルケドン派信仰に対してきわめて厳格な立場をと
- ※ 六世紀のジャフナ家の君侯も、非カルケドン派信仰の擁護者としての側面を持っており、彼らもまた「異端」と呼びうる存在だった。
- Nikephoros, ch. 26 (p. 74)
- きである。P. Schadler, John of Damascus and Islam: Christian ただしダマスクスのヨハネスのように、アラブ支配下で生活している ただしダマスクスのヨハネスのように、アラブ支配下で生活してい

- Heresiology and the Intellectual Background to Earliest Christian-Muslim Relations, Leiden, 2018, pp. 210–212.
- cf. J. Haldon, "Eastern Roman (Byzantine) Views on Islam and on Jihād, c. 900CE", in: R. Balzaretti et al. (eds.), *Italy and Early Medieval Europe: Papers for Chris Wickham*, Oxford, 2018, pp. 476-485
- ② キュロスの方策は、かつてのゲルマン系諸部族とローマ帝国が結ん ③ キュロスの方策は、かつてのゲルマン系諸部族とローマ帝国が結ん
- 3 Doctrina Jacobi, V. 5 (p. 193)

Epigraphik 173 (2010), pp. 136-157

(以下、Morelli (2010)と略).

- 5) Dan. 7: 2-14.
- 3 cf. Kaegi (1969), p. 141.
- Dan. 11: 31, Matth. 24: 15
- s) cf. Hoyland (1997), p. 533
- Shoemaker, op. cit.
- Morelli (2010), p. 147.

Ξ 神に守られる帝国

認 識 の 変 化

アラビア語が文章語として利用されはじめることも、このような状況を示すものである。 ア半島北部のアラブ人たちはジャフナ家などを通じて、国家的な組織運営も経験していた。六世紀から、これらの地域 ば、古代末期からアラブ人はローマ(やペルシア)の行政制度を知悉し、それに参加もしていたからである。 行政は特に大きな混乱を経験することなく、ビザンツ支配期から連続していく。それはある意味当然であった。 も持った人びとであることが明らかになっていく。実際、シリア・パレスティナにおいてもエジプトにおいても、 が短期間で消滅せず、 人びとはアラブが短期間で姿を消すと考えていた。だが次第にアラブが蛮族の武装集団ではなく、行政についての手腕 ビザンツ帝国やキリスト教徒のアラブに対する認識は、 国家としても安定しつつあったことである。前章で述べたように六三〇年代には、 六五〇年代までに大きく変化した。その最大の要因は、 ビザンツ帝 特にアラビ 何となれ 現地 アラブ 国

に参加していた人びとも、大半はアラブ支配下で引き続きその任にあたることになる。ダマスクスのヨハネスの祖父や父 それをほぼそのまま受け継いだ。シリア・パレスティナ地域も状況は似たようなものだった。そして旧来から統治や行政 は有名な例であるが、エジプトでも征服前後で同一人物が く形でおこなわれる。エジプトではアムル・ブン・アル・アースは、 和平協定によって成し遂げられたことも無視できない。そのため、征服後の政治 また、シリア・パレスティナ地域においてもエジプトにおいても、多くの場合征服が軍事的手段ではなく、 パ ガ ルコスを務めている例などが看取できる 現地の行政・軍事機構と協定を結ぶことによって、 行政の体制も、 当然ながら協定に基づ

降伏協定

さらに、アラブは古代末期の行政機構を単にそのまま受け継いだわけではなく、

必要に応じた改編を、

征

旧服直後からお

されている。例えば村落部ではコーリオン、都市部ではラウラという、新たな行政・財政上の用語が利用されるようにな こなっている。シイペステインらの研究に基づいて、エジプトを例にして概観する。エジプトにおける行政機構は少なく った。また、六五〇年頃までに人頭税(ディアグラフォン/アンドリスモス)が新たに導入された。アラビア語やヒジュラ暦® とも七世紀末までビザンツ期のものを基本としたシステムが維持されるが、アラブ国家に特有の制度も征服直後から導入

を用いた文書も、早い時期 なり早い時期から示していたのであり、アラブが「早晩姿を消す」可能性は初期の段階から、かなり小さかった。 ツ帝国の内部からの「反乱、簒奪」によって誕生したと言える。新たに誕生した国家を統治していく能力を、アラブはか 構を全体として踏襲して生まれたのが、アラブ国家であった。ホイランドが指摘するように、アラブ国家はむしろビザン 要するに、古代末期から蓄積された豊富な行政経験を持つ人びとが、ビザンツ帝国(およびササン朝ペルシア) (知られている最古のものは六四三年)から見られる。

期に明らかになりつつあった。そのためアラブに対する認識や、現実の政治的・軍事的対応にも、変化が不可避となって かった。だがアラブが短期間で姿を消す、あるいは勢力を後退させるという見通しが正しくなかったこともまた、この時 くとも地中海方面については)停滞し、ビザンツ帝国もシリア・パレスティナ地域やエジプトを奪回する望みを捨てていな 第一章で述べたように、ビザンツ帝国とアラブの戦いは六四〇年代には膠着状態となっていた。アラブの拡大は

政治的な局面では第一章でも触れた、六五一年頃にビザンツ帝国がアラブと結んだ休戦協定が注目される。

和平を結ぶようにギリシア人に促した。だがコンスタンス帝はまだ若かったため、軍の承認なしにこの和平を実行する権威を持 が地上に慈悲を与え給うことを期待する方が得策だと判断した。それで皇帝は使者を送って和平交渉を行った。イスマエリタイも ⑦しかしながらコンスタンス(二世、在位六四一―六六八/六九年)帝は恐れをなし、使者を送って貢納を払い、和平を結び、

58

結し、(ダマスクスを)去った。 エリタイの軍の指揮官であるムアーウィヤと会見した。彼は貢納金の額を示し、 が望む条件で和平を結ぶように命じた。それでプロコピオスは皇帝の命に従って軍の意見を聴いてからダマスクスに赴き、イスマ ていなかった。それで皇帝はプロコピオスに手紙を書き、ダマスクスに赴いてイスマエリタイの指揮官のムアーウィヤと会い、 国境について議論した。プロコピオスは和平を締

倒的な優位にあることをビザンツ帝国が認めざるを得なかったことも看取できる。アラブがすぐに姿を消す存在ではなく、 ビザンツの中央政府がアラブと交わした、おそらくはじめての国家間の交渉・和約だった。つまりこの休戦協定はアラブ 永続性を持つ強力な国家であることを、ビザンツ帝国は認識したのである。 アラブに対して自らを明確に劣位に位置づける内容(人質、貢納金の支払い)にもなっており、アラブが自分たちよりも圧 が「国家」としての実体を持っていることを、六五一年頃までにビザンツ帝国が公式に認めたことを意味している。また、 はアラブとビザンツ帝国の国家間で結ばれた協定と理解できる。この協定の持つ意味は大きい。なぜならこの休戦協定は、 この報告では、休戦協定を結んだ直接の当事者はプロコピオスとムアーウィヤという双方の軍指揮官であるが、実際に

が、 宗教的な面でもアラブに対する認識は変化していく。七世紀中盤以降の認識について教えてくれる同時代資料は乏しい もっとも重要なものとしてアルメニアで六六○年代初頭に書かれたと思われる、セベオスの歴史書が挙げられる。

ダニエルは、この地に起きる災厄を既に預言で示していた。 ⑧海陸に火を放ったイスマエリタイの部隊の恐るべき悪行を描写できるものがどこにいるのだろうか?しかしながら、 南方から興隆してきたこの第四の野獣は、 大天使が説明しているように、イスマエリタイの王国である― 預言者は四匹の野獣で、地上に興起する四つの王国を指し示した。 第四の野獣 祝福すべき

(他の)すべての王国よりも強力になる。そして全地を食らい尽くす。」「一○の角、すなわち一○人の国王が立つ。

の王国は興隆し、

59 (59)

記述は、 はローマ帝国ではなく、アラブである。そしてケーギも指摘しているように、アラブを「第四の野獣」と見なす アラブが長期にわたって存続する国家であると認識したことを示している。 前章の⑥と同様、「ダニエル書」に基づいている。だが六三〇年代の⑥とは異なり、セベオスでは

ことによって、

時のキリスト教徒に広く共有されていた。例えばフランク王国で六五〇年代に書かれたと思われるフレデガリウスの うになっていった。例えばセベオスの以下の記述は、アラブの信仰に対する認識の変化を示すものである。 期化・安定化していった結果、彼らが短期間で姿を消すという見通しを修正する必要に迫られたことが看取できる し七世紀後半には、キリスト教徒の勝利までの期間がかなり長く想定されており、ここからもアラブ国家による支配が長 したと思われる、いわゆる『偽メトディオスの黙示』でも、神の怒りゆえにイスマエリタイが遣わされたとされる。しか 代記でも、 神の懲罰として、サラケノイが遣わされたと見なしている。このような考え方はソフロニオスに特有のものではなく、 攻撃をおこなっている理由を「我々の罪」に求めている。つまりソフロニオスは、キリスト教徒の犯している罪に対する アラブの信仰がキリスト教徒のものとは異なるものであり、 同様の認識は、他の点からも確認できる。前章で触れたようにソフロニオスは①で、サラケノイが突如ロ ヘラクレイオス帝の軍の敗北の原因は「神の剣 (gladio Dei)」とされているし、七世紀後半にシリアで成立 独自の宗教的慣行を持っていることも徐々に認識されるよ マ帝国

知っていたからであった。その言葉は天上からのものだったので、 の説教者として現れた。 イシュマエルの同じ子孫たちの中にマフメットという名の商人が、あたかも神の使いであるように、真実の道について 彼はイシュマエルの子孫たちに、 アブラハムの神を認めるよう説いた。 (彼の) 命のもと、彼らはひとつの宗教の下にまとまっていった。 それは、 彼がモーセの歴史を学び

ラハムに与えたあなた方の地に進み、自らのものにせよ。戦いであなた方を遮るものは誰もいない。神はあなた方とともにあるの 約束したことをあなた方に実現しようとしておられる。アブラハムの神だけを真摯に愛せ。そして神があなた方の父祖であるアブ を、イスラエルの民を愛している間は実現していた。だがあなた方もアブラハムの子孫であり、今や神はアブラハムとその子孫に 言った。「こうした誓いによって神はアブラハムにこの地を約束し、また子孫が永遠に続くことを約束したのだ。神は約束したこと 彼らはそれまでの無益な崇拝をやめ、 ットは彼らに法を与えた―死肉を食べてはならない、飲酒してはならない、嘘をついてはならない、密通してはならない―。彼は 彼らの祖先であるアブラハムの前に姿を現した生ける神への信仰に回帰した。それでマフォ

代末までに認識したことを示している。 されていただろう。つまりこの記述は、アラブが自分たちとは異なる信仰を抱いていることを、キリスト教徒が六五〇年 とが、セベオスの記述から示唆される。このような認識は、ビザンツ帝国の人びとをはじめとするキリスト教徒にも共有 ダヤ教やキリスト教との共通性と同時に、ユダヤ教やキリスト教とは異なる性格を持つ信仰という認識が生まれていたこ ここではアラブは、 ムハンマドの指導のもと、「アブラハムの神」を愛し、信仰する人びととして認識されている。ユ

(二) 六五四年の衝撃

になってきている。六五一年頃からの三年間の休戦期間の間、アラブは十分な準備をおこない、 の攻略を目指した。だが攻撃は暴風雨によって大きな被害を受けた結果、失敗に終わる。 章でも述べたように、アラブによる最初のコンスタンティノープル攻撃が六五四年にあったことが認められるよう コンスタンティノーブル

⑩ この日、 |嵐が続いた。イスマエリタイは主の恐るべき一撃を目にして、肝を潰した。 敬虔なるコンスタンス帝の祈りが通じ、 神がふりおろした一撃によって、 首都は救われた。六日間にわたって強風と海

こなかったアラブにとっては、これは最初の大きな失敗といえるものであった。だがビザンツ帝国にとっては、この事件 は特に二つの点で、大きな意義を持つものであった。 アラブはコンスタンティノープルの攻略、そしてビザンツ帝国の併呑に失敗した。それまで大きな敗北や失敗を犯して

は改革を迫られることとなった。 を一層強く実感することになった。そのため強力なアラブ国家に対抗して自らの存続を可能とするために、ビザンツ帝国 ルへの大規模かつ組織的な攻撃を計画的に実行できる、自らよりも圧倒的に強力な国家が隣接し、脅威となっていること 協定からもわかるように、従来からある程度認識はされていた。だが六五四年にビザンツ帝国は、コンスタンティ ツ帝国に強く実感させるものとなったことが挙げられる。もちろんアラブが強力な国家であることは、六五一年頃の休戦 第一の意義としては、六五四年のコンスタンティノープル攻撃は、アラブがきわめて強力な国家であることを、

た事例も確認できる。アラブの侵入に対応するためのインフラの整備が、 市で、新たな防壁が建設されていった。アモリオンのように、古代末期からあった城壁に加えて、第二の城壁が建設され である。 の諸都市の防備の強化である。別稿で紹介したようにコンスタンス二世の治世後半からペルガモンなどの小アジアの諸 実際六五〇年代後半からは、さまざまな注目すべき施策が実行に移されている。その第一に挙げられるのは、 コンスタンス二世の治世後半から本格化したの 小アジア

地域など、 六五〇年代末以降、 かつての支配領域でもビザンツ貨幣の流通が存続していた。貨幣の発行量の縮小によって、小アジアにおける 貨幣の発行量が急速に縮小した。それまで貨幣は大量発行が続き、 シリア・パ また皇帝にとっても、

以来、

後は小アジアが帝国の中核領域となる、という認識を前提としたものと考えることができる。 貨幣流通が完全に姿を消したわけではないが、少なくとも旧東方領域への貨幣供給量は減少した。この施策は、 パレスティナ地域やエジプトなどのかつての支配領域がもはや自らの領域ではない(そして戻ってこない)こと、そして今

ンデスの見解が広く認められるようになっている。こうした制度改革も、アラブに対する態勢整備の一環と見なすことが® 資料の分析などに基づいた、各属州で徴収された税を軍に供給することを担当する役職に六五〇年代になったというブラ 六五〇年代には軍に対する補給システムの整備が進められた。それを示すのが、ゲニコス・コンメル ゲニコス・コンメルキアリオスの職務についてはさまざまな議論がおこなわれてきたが、 現在では印章

家の勢いを止めたことによって、神の加護がなおもビザンツ帝国にある、ということが確認できたからである。 さらに大きな意味を持つことになった。それは六三〇年代以来、ほぼ失敗することなく勝利・拡大を続けてきたアラブ国 れるコンスタンティノープル」イメージが強調されたことも、かかる意識のあらわれである。しかし六五四年の事件は ヴァール人によるコンスタンティノープル包囲の際にマリアのイコンが掲げられ、アヴァールの撤退後に「マリアに守ら るローマ帝国 に、「神がビザンツ帝国を守護している」ということが強く意識されるようになったことである。もちろん「神に守られ 六五四年の事件の持つ第二の意義は、⑨で「主の恐るべき一撃」といった表現がなされていることから示唆されるよう (=ビザンツ帝国)、コンスタンティノープル」という考え方は七世紀以前から存在していた。六二六年のア

単意論の導入がアラブの出現とほぼ同時期だったため、皇帝の政策に対する神の怒りがアラブの勃興を引き起こしたとい キリスト教世界の頂点としての皇帝の権威や正当性が揺らいでいたからである。 六五四年の事件は大きな意味を持った。なぜならヘラクレイオス帝による単一エネルゲイア論 コンスタンス二世も即

単意論を激しく攻撃する修道士マクシモスや教皇マルティヌス一世らの言動、そして彼らに扇動された陰謀や反乱

ら「敬虔なるコンスタンス帝の祈りが通じ」と述べているように、コンスタンス二世には神の加護があるという考えが説 暴風雨という奇蹟的な出来事によってアラブが大きなダメージを受けたことも相まって、非カルケドン派のセベオスです に悩まされていた。しかし六五四年のコンスタンティノープル包囲の失敗は、こうした批判に対する大きな反証となった。

得力を持つようになった。その結果、「神の加護を受けた皇帝が頂点に立つキリスト教徒共同体=ローマ帝国」という方

地方の君候のジュアンセルと会見し、彼に「真の十字架」の一部を贈った。 コンスタンス二世は六五九―六六〇年に、コーカサス地域に遠征をおこなう。 その際にコンスタンス二世は、 イベリア

向性が再認識され、さらに積極的に指向されることになる。

を焼き尽くすものを彼に与えてこう言った。「これがあなた自身やあなたの子たちにとって、敵の前での強固な塔になるように!」 メディアに赴いた。そしてジュアンセルの到着を聞いて彼と会うためにクングル村にやって来ていた皇帝のもとに姿を現した。皇 十字架を持参していた。皇帝はジュアンセルと会見するために配下の者を使者として派遣していた。それでジュアンセルは急いで シアの貴族たちとともにペルシア帝国に到着した。彼は既にこの帝国を制圧しており、また輝かしいこの世の光であるキリストの ヘラクレイオス帝の孫のコンスタンティノス帝(=コンスタンス二世)が治世第一九年に、大量の兵と騎兵の精鋭、そしてギリ 彼は皇帝に、永遠の主の十字架の一部を求めた。それで皇帝は救済の光を手にして彼の目の前でその一部を削り、この世の罪 妻の死を理由に身に着けていた喪服を脱ぐように命じ、彼に国王の衣装をまとわせた。このことに勇気づけられ

て「神の加護を得ている皇帝が支配するキリスト教徒の共同体・地域」こそが、「ローマ帝国」であった。 タンス二世は ジュアンセルとの会見は、コンスタンス二世にとっては生涯の絶頂期を示すものだったかもしれない。この時のコンス カスピ海沿岸部から北アフリカにおよぶ地域を支配する、 キリスト教徒の頂点に立つ存在であった。そし

六六八/六九―六八五年)、ユスティニアノス二世 イデンティティは、さらなる裏付けを得たことになる。コンスタンス二世の後継者であるコンスタンティノス四世 帝国が反撃に転じていった。「神の加護を得ている皇帝が支配するキリスト教徒の共同 ノープルも再びアラブ軍の攻撃を受ける。だがコンスタンティノープルはこの時も陥落せず、 六六○年代に入ると、 「神の加護を得ている皇帝が支配するキリスト教徒の共同体・地域=ロ カリフとなったムアーウィヤのもとでアラブは再びビザンツ帝国へ (在位六八五—六九五、七〇五—七一一年) ーマ帝国」 意識 は全地公会議を開催するが、 !体・地域=ローマ帝国」とい の攻勢を強め、 六七○年代にはビザンツ コンスタンテ

そして特に六五四年のコンスタンティノープル攻撃が、ビザンツ帝国に大きな衝撃を与えるものとなった。つまりビザン ツ帝国にとっては、自らよりもはるかに強力な他者であるサラケノイとの併存・対峙が不可欠となったのである。そのた 存在する勢力であり、また自分たちキリスト教徒とは異なる信仰を持つ人びとであることをも、 長していった。そのためにビザンツ帝国もキリスト教徒も、 短期間に姿を消すと思われていたアラブであったが、 小 括 アラブに対する認識を改めていく。 現実には六四○年代以降も拡大を続け、 の明確化という意味があった。 アラブが長期にわたって 徐々に認識されていった。 安定した国家 成

六五四年の ローマ だが六五四年のコンスタンティノープル攻撃は同時に、彼らサラケノイが無敵ではないこと、そしてビザンツ帝国や皇 帝国」というアイデンティティの再認識・明確化が、 加護があることをも示すものでもあった。「神の加護を得ている皇帝が支配するキリスト教徒の共同 アラブによるコンスタンティ プ ル攻撃は、 近年その存在が認められるようになった事件であるが、 七世紀中盤以降進展したのである。 第一章で触れたように 体

つ意義や影響力はきわめて大きなものであったといえよう。

め六五〇年代以降、ビザンツ帝国ではサラケノイに対抗していくための制度改革などが進展した。

66

- G. Fisher. Between Empires: Arabs, Romans, and Sasanians in Late Antiquity, Oxford, 2011, pp. 135–138, 144–153; Z. T. Fiema et al., "Provincia Arabia: Nabataea, the Emergence of Arabic as a Written Language, and Graeco-Arabica", in: G. Fisher (ed.), op. cit., pp. 373–433, pp. 395–421.
- 協定を結んではいない。Morelli (2010), p. 157. といった他のエジプト征服者たちは、エジプト征服の際にそのような③ モレッリが述べるように、アレクサンドロス大王やアウグストゥス
- ④ ヨハネスの祖父のマンスールは、アラブ軍がダマスクスを攻撃した
 ロハネスの祖父のマンスールは、アラブ軍がダマスクスを攻撃した
 Geschichten und Legenden kompiliert von Sa'id ibn Baṭriq um 935
 A.D., Louvain, 1985, S. 115-117, 父のサルジューン・ブン・マンスールは、ムアーウィヤの側近として活動した。H. Kennedy, "Syrian Elites from Byzantium to Islam: Survival or Extinction?", in: J. Haldon (ed.), Money, Power and Politics in Early Islamic Syria: A spring of current debates Formborn 2010 pp 181-200 pp 108-104
- review of current debates, Farnham, 2010, pp. 181-200, pp. 193-194.

 B 古代末期のエジプトに置かれていた官職。パゴス/パグスという行

 B などを担当した。O. Nicholson (ed.), op. cit. p. 1122.
- ® P. M. Sijpesteijn, Shaping a Muslim State: The World of a Mid-Eighth-Century Egyptian Official, Oxford, 2013 (以下, Sijpesteijn (2013) 226), p. 73
- © Sijpesteijn (2013), p. 70.
- ⑤ J. Gascou, "De Byzance à l'Islam: les impôts en Égypte après la conquête Arabe, à propos de K. Morimoto, The Fiscal Administration of Egypt in the Early Islamic Period", JESHO 26

- (1983), pp. 97-109, pp. 102-103; Sijpesteijn (2013), pp. 69-70
- SB (=Sammelbuch griechischer Urkunden aus Aegspien) VI 9576;
 P. Berol 15002.
- Hoyland (2015), p. 95.
- 一時的な奪回に成功している。 実際、六四五年にはエジプトに軍を派遣して、アレクサンドリアの
- Sebeos, ch. 45 (p. 112).
- ③ A. Kaplony, Konstantinopel und Damaskus: Gesandtschaften und Verträge zwischen Kaisern und Kalifen 639-750: Untersuchungen zum Gewohnheits-Völkerrecht und zur interkulturellen Diplomatie, Berlin, 1996. S. 23-32. なお、これ以前にダマスクスとコンスタンティノーブルの間で使者のやり取りがあった可能性はある。cf. ibid., S. 19-21
- Theophanes, p. 344.
- Sebeos, ch. 44 (pp. 105-106)
- (£) Kaegi (1969), pp. 146–147
- Fredegarius, Chronicon, MGH SRM, Hannover, 1888, IV. 66 (p. 154).
- ® G. J. Reinink (tr.), Die syrische Apokalypse des Pseudo-Methodius ランドが指摘しているように、「罪」の内容についてはさまざまな解 デンドが指摘しているように、「罪」の内容についてはさまざまな解 の内容についてはさまざまな解
- 角も高く揚げられるだろう」と続いている。Ps. Methodius, XI. 8-13の被害を受けたことを述べた後、「荒廃者はさらに強力になり、そのとともにシチリアやギリシア、エーゲ海域なども「破壊者」「荒廃者」とともにシチリアやギリシア、エーゲ海域なども「破壊者」「荒廃者」と

- (S. 45–48)
- Sebeos, ch. 42 (pp. 95-96)
- 代記』でも報告されているが、休戦期間が二年とされている。 がソツ支配下にあった。拙稿「首都を離れるビザンツ皇帝」参照。 アルメニアは非カルケドン派地域であるが、六六一年まではほぼビ
- Sebeos, ch. 50 (p. 144)

Theophanes, p. 344. ただしセベオスの伝える三年が正しい。

- Sebeos, ch. 50 (p. 146)
- ② 六五六年からのアラブの第一次内戦の一因になったと考えられる。
- 五頁。 五頁。 五頁。 五頁。 五頁。 五百。 五一、二〇一八年、二五―三 五月。
- © C. S. Lightfoot, "Amorium", in: Ph. Niewöhner (ed.), The Archaeology of Byzantine Anatolia: From the End of Late Antiquity until the Coming of the Turks, Oxford, pp. 333-341, p. 335; C. S. Lightfoot & E. A. Ivison (eds.), Amorium Reports 3: The Lower City Enclosure Finds Reports and Technical Studies, Istanbul, 2012.
- 図 J. Haldon, the empire that would not die: The Paradox of Eastern Roman Survival, 640-740, Cambridge MA, 2016 (以下、Haldon (2016)と略), pp. 252-255. コンスタンス二世期以降も、アモリオンなどの主要都市では貨幣流通が続いたと思われる。C. Morrison, "Coins", in: Ph. Niewöhner (ed.), op. cit., pp. 71-81, pp. 78-79.
- ® M. Phillips, "The Import of Byzantine Coins to Syria Revisited", in: T. Goodwin (ed.), Arab-Byzantine Coins and History: Papers presented at the Seventh Century Syrian Numismatic Round Table held

- at Corpus Christi College, Oxford on 10th and 11th September 2011.
 London, 2012, pp. 39–72: R. G. Hoyland, "Numismatics and the History of early Islamic Syria", in: A. Oddy (ed.), Coinage and History in the Seventh Century Near East 2: Proceedings of the 12th Seventh Century Syrian Numismatic Round Table held at Gonville and Caius College, Cambridge on 4th and 5th April 2009, London, 2010, pp. 81–93.
- ッ ビニコス・コンスンティリナス こりようこしょでう 義命は、引可能性)をも想起する必要がある。M. Phillips. *op. cit.*, p. 59. こりようで、アラブ側の状況(六五〇年代末以降、ビザンツ帝国からの貨幣の流入を許容しなくなったの。
- Montinaro, op. cit.
- ② W. Brandes, Finanzverwaltung in Krisenzeiten: Untersuchungen zur byzantinischen Administration im 6. -9. Jahrhundert, Frankfurt a. M., 2002, S. 239-426. なお、ゲニコス・コンメルキアリオスの前身であるコメス・コンメルキオルム comes commerciorum は、国境部であるコメス・コンメルキオルム comes commerciorum は、国境部における関税や交易の管理をおこなう役職であった。ibid., S 247-255.
- Theodorus Syncellus, Historia brevis de obsidione Avarica Constantinopolis, in: L. Sternbach, Analecta Avarica, Cracow, 1900 pp. 334-336, 17-25 (p. 334).
- J. D. Howard-Johnston, "The siege of Constantinople in 626", in: C. Mango & G. Dagron (eds.), Constantinople and its Hinterland, Aldershot, 1995, pp. 131–141, p. 141; W. E. Kaegi, Heraclius: Emperor of Byzantium, Cambridge, 2003, pp. 139–140; P. Sarris, Empires of Faith: The Fall of Rome to the Rise of Islam, 500–700, Oxford, 2011, p. 254.

- in: T. Minamikawa (ed.), New Approaches to the Later Roman Byzantine and Arab Strategy in the mid 7th century Asia Minor" Empire, Kyoto, 2015, pp. 147-161 cf. I. Kobayashi, ""By His Upraised Arm God Saved The City".
- 第 単一エネルゲイア論が広く公にされた『プセフォス』が六三三年。 Liverpool, 2014, pp. 5-108, pp. 9-11 Introduction", in: R. Price (tr.), The Acts of the Lateran Synod of 649 どの一連のアラブに対する大敗北とほぼ同時期。『エクテシス』の発 アジュナダインの戦い(同)、ヤルムーク河畔の戦い(六三六年)な 『エクテシス』が六三六年の発布で、ダティンの戦い(六三四年)、 (六三八年ではなく六三六年)については R. Price, "General
- ② 皇帝に対するソフロニオスやマクシモスらの批判、およびその他の 活動については、Booth (2014)で詳しく論じられている

- が強くなった。cf Booth (2014), p. 306; Haldon (2016), pp. 85-86 マクシモスらに対する処罰も、六五四年の事件によってその正当件
- ③ この時期、当然ながら既にササン朝ペルシアは滅亡しているので、 ここでの「ペルシア帝国」とはジュアンセルの支配している領域を指
- Movsēs Dasxuranci, London, 1961, II. 22 (p. 118) コンスタンティノープル第三全地公会議(六八〇―六八一年)、ト C. J. F. Dowsett (tr.), The History of the Caucasian Albanians by
- ゥルロの公会議 (六九一一九二年)。
- Early Medieval Christianity, Leiden, 2011, pp. 150-168 Ph. Booth (eds.), An Age of Saints?: Power, Conflict and Dissent in Icons from Justinian II to Leo III", in: P. Sarris & M. Dal Santo M. Humphreys, "Images of Authority?: Imperial Patronage

四 ムアーウィヤと「ローマ帝国

ができなかっただけでなく、ビザンツ帝国に対する絶対的な優位を形成することにも、完全には成功しなかった。② ブ国家にとっては大きな問題であり、それゆえにビザンツ帝国征服作戦の失敗が、二回の内戦の一因にもなった。八世紀 前半に中央アジアからイベリア半島にまで及ぶ大帝国を作ったにもかかわらず、アラブは結局ビザンツ帝国を滅ぼすこと ンスタンティノープル攻略・ビザンツ帝国征服の失敗は、ジハードによる征服・拡大によって統合されていた初期のアラ わたってコンスタンティノープルを攻撃し、ビザンツ帝国の滅亡・併呑を目指したが、その試みはいずれも失敗した。コ 六五一/五二年にササン朝ペルシアを滅亡させた後、アラブ国家は七世紀の間に六五四年、六六七―六六九年の二回に

アラブがビザンツ帝国を滅ぼすことができなかったということは、アラブ国家にとってもビザンツ帝国との併存・対峙

68

化していく。

ン ・

マンスールがアブド・アル・マリク時代に発言力を失っていったという、

ムアーウィヤ治世には大きな政治的発言力を持っていた、

年)のような扱いをイスラーム世界で受けることは、ついになかった。 であったこととは対照的である。同時代の著名な君主にもかかわらずユスティニアヌス一世 きなかった。 ザンツ帝国を完全に滅ぼすことができなかったため、アラブ国家はローマ帝国を自らの「過去」として独占することが が不可避になったということ、そしてビザンツ帝国 イスラームの時代になっても君主としての高い評価を受け続けたササン朝ペルシアのフスラヴ一世 を意味する。そしてそれは、アラブ国家が「ローマ帝国の後継者」になることができなかった、ということでもある。ビ 後のイスラーム世界で、ササン朝ペルシアを自らの「過去」として(都合の良い部分を) П ローマ帝国がアラブにとっての「他者」として存続したということ (在位五二七―五六五年) は 利用することが可能 (在位五三二—五七九

ンツ的な行政システムが、アブド・アル・マリクの治世以降急速にアラブ化していく。アブド・アル・マリク時代の貨幣 この時期であった。また、シリア・パレスティナにおいてもエジプトにおいても、征服期以来続いていたロ の行政制度が維持され、 おけるアラビア語 君主の肖像が排除されたデザインには、ムスリムとしてのアイデンティティが明確に表象されている。行政などの分野に 金貨は、 あ が大帝国だけでなく、新たなイスラーム文明としての性格を強めていくのは七世紀末のアブド・アル・マリク治世以降 (および度量衡) ら、「ムスリム」としての、そして「アラブ」としてのアイデンティティが明確になるのも、 だが、このような状況だったからこそ、アラブには独自のイスラーム文明の創出が不可避になったともいえる。 重量の違いなども含めて、先行するビザンツ帝国とは大きく異なる制度の導入を明確に示すものであった。 の改革は、よく知られている一例であろう。アブド・アル・マリクが六九〇年代に導入したディナール の利用もさらに深化していった。例えばエジプトでは、前章で触れたように七世紀末までビザンツ時代 行政文書でもギリシア語の利用が一般的だったが、七世紀末以降はアラビア語による文書が 七世紀末 ―八世紀初頭の 1 ・マ的 アラブ ・ビザ 般

ブ

ダマスクスのヨハネスの父のサル

アラブの歴史書が伝えるエピソードも、

かる状況を反映しているものといえる。このような一連の大きな変化は、 ビザンツ帝国を滅ぼすことができないことが明

らかになりつつあった時期と一致するが、これは偶然ではない。

併呑したことの文化的なインパクトの大きさを強調している。 アラブは古代末期のゲルマン人のように、 ったからだと論じている。 ローマ文明と大きく異なったものになった理由として、アラブがローマ帝国だけでなくササン朝ペルシアの後継者でもあ イスラームが 彼は、もしアラブが征服していたのがシリアやエジプトのような旧ローマ帝国領のみだったら、 (キリスト教と同様) アブラハム的一神教の一バージョンであるにも関わらず、 部分的にビザンツ帝国に同化していただろうと論じ、 ササン朝ペルシア全体を キリスト -教的

たのである。 る。 れなかった。むしろ後継者になれなかったからこそ、キリスト教的なローマ文明との差異を明確にしていく必要に迫られ 置づけるという点においては首肯できる。だがアラブをローマ帝国の後継者としても位置づけることには注意が必要であ ブースのかかる主張は、ペルシアの文化的遺産の大きさを重視する点や、ササン朝ペルシアの後継者としてアラブを位 アラブは確かに、 ローマ帝国の文化的遺産を受け継いでいる。しかし結局、アラブは「ローマ帝国の後継者」には

ば、アラブ国家はビザンツ帝国やキリスト教徒との差異や独自性を強く意識する必要はない。 指していたムアーウィヤは、このプロセスの完遂を目指していたといえよう。そしてこの「簒奪」が完遂されるのであれ 紀末以降とは大きく様相を異にする光景が現出していた。第三章で述べたように、アラブはビザンツ帝国内部からの したがって、アラブ国家が「ローマ帝国の後継者」となる可能性が失われていなかったムアーウィヤ時代までは、 簒奪」によって誕生したという側面を持つ。生涯を通じてコンスタンティノープルの攻略とビザンツ帝国の併呑を目 七世

ムアーウィヤがカリフに就任した時の状況についての 『マロン派年代記』の有名な記述は、⑩ きわめて興味深

域内のすべての村落や都市で彼が王として宣言されるべきこと、彼を王として歓呼すべきことが布告された。⑫ 九七一年(1) ルゴタの丘に登って座した。 同じ年の七月に、 コンスタンス帝の治世第一八年、 エミールたちや多くのアラブ人が集まってムアーウィヤに右手を差し出した。それから、 彼はそこで祈りをおこない、ゲッセマネに赴いて祝福されたマリアの墓に行ってそこで祈りを捧げ 多くのアラブ人がイェルサレムに集まってムアーウィヤを王とした。それから彼は

たとする、ドナーやシューメイカーの主張も、首肯できるものである。 た地上の支配者」という、 が強い違和感を示してはいなかったことを示している。またブースが指摘するように、ムアーウィヤは「神の恩寵を受け が同時にこのエピソードは、 支持を得るために不可欠だったと考えており、確かにそのような政治的・軍事的な意図があったことは否定できない。だ か。 る。 ほ あ なっているのは、 リアの墓や、 れていなかった。ムアーウィヤの時代には、 ダヤ教に対してもアブラハム的一神教としての共通性がなお強く意識され、アラブの信仰と大きく異なるものとは意識さ ŋ ムアーウィヤのカリフ就任儀礼がイェルサレムでおこなわれていること、 ゲッセマネやゴルゴタの丘の訪問についてマーシャムは、ムアーウィヤ配下に多数いたキリスト教徒の軍団などの マーシャムはサルジューン・ブン・マンスールらがこの儀礼のプランニングにかかわっていた可能性をも指摘して キリストが磔刑にされたゴルゴタの丘を訪れていることは注目に値する。 六三〇年のヘラクレイオスのイェルサレム入城と、六三七/六三八年頃のウマル キリスト教的ローマ皇帝のイメージを自らのものにしようとしていた。そしてキリスト教やユ ムアーウィヤの時代にはキリスト教的、 キリスト教徒 (やユダヤ教徒) ローマ帝国的なイメージを取り込むことに、アラブ Ł またその際にムアーウィヤがゲッセマネの 「信仰者(ムーミニーン)」の一部をなしてい カリフ就任儀礼の先例・ のイエルサ モデル

キリスト教徒やユダヤ教徒たちも含めて、支配をおこなおうとした。

ムアーウィヤは、シ 神教を信仰する人々

シリアにおけるキリスト教徒

の頂点、

支配者として行動

まりムアーウ

イヤは、

キリスト教やユダヤ教をも含むアブラハム的

で帝国をまとめようとした、ヘラクレイオス帝やアレクサンドリア総主教キュロスらの行動の延長線上にある。 ィヤがめざしたアラブ国家は、「ローマ帝国の後継者」であることを強く意識したものでもあったと言えよう。 (ヤコブ派とマロン派) の対立の調停をもおこなっている。ムアーウィヤの行動は、異端をも取り込んでカルケドン派信仰® ムアーウ

てローマ帝国=ビザンツ帝国は、そしてキリスト教信仰は、「他者」として併存・対峙しなければならない存在となった。 出し、新しい文明を作り出していかなければならなかったのである。 ローマ帝国の文化的遺産を独占することができなかったため、アラブは「ローマ帝国の後継者」ではない新たな道を踏み り続け、キリスト教信仰を核としたローマ帝国アイデンティティを強く再確認・主張していった。そのためアラブにとっ だがムアーウィヤのめざした方向性は、ついに実現することがなかった。ビザンツ帝国は「ローマ帝国の後継者」であ

- Hishām Ibn 'Abd al-Malik and Albany, 1994, p. 20. だが実際には、第一次内戦を含む四回の動揺すべ ンツ帝国に対する敗北が引きがねとなっていることを指摘している。 アッバース朝への交代期)のうち、第一次内戦をのぞく三回が、ビザ た四回の国内の動揺(第一次内戦、第二次内戦、ウマル二世の治世 ブランキンシップは、ウマイア朝期までの初期のアラブ国家で起き Blankinship, The End of the Jihad State: The Reign of the Collapse of the Umayyads,
- ② アラブで内戦が起きている時期のように、アラブがビザンツ帝国に 貢納金を支払うなどの条件で結ばれた休戦協定もあった。 、ビザンツ帝国に対する敗北の結果として起きていた。
- Today, April 2017, pp. 28-36
- © C. E. Bosworth (tr.), The History of al-Ţabarī pp. 154-156 (n. 395); cf. Booth (2015), pp. 221-222; 十一世紀にセルジ Sāsānids, the Byzantines, the Lakhmids, and Yemen, Albany, 1999

- アルムルク(井谷鋼造・稲葉穣訳)『統治の書』岩波書店、二〇一五 ある統治者として高く評価され、何度も言及されている。ニザーム・ においても、フスラヴ一世(公正者ヌーシルヴァーン)は公正で知識 ユーク朝の宰相であったニザーム・アルムルクが著した『統治の書
- ⑤ *Hagarism*, p. 29; ドナー『イスラームの誕生』二一○─二三三頁: Webb (2016), p. 139
- et. al (eds.), The Encyclopaedia of Islam New Edition vol. II, Leider 1991, pp. 297-299; ドナー『イスラームの誕生』二一五―二一六頁。 Ch. F. Robinson, 'Abd al-Malik, Oxford, 2005, pp. 71-80; B. Lewis
- (c) Sijpesteijn (2013), pp. 91-111; M. S. A. Mikhail, From Byzantine to Islamic Egypt: Religion, Identity and Politics after the Arab Conquest, London, 2014, pp. 106-135; cf. P. Sarris, op. cit., pp. 297
- 若林啓史『聖像画論争とイスラーム』知泉書館、二〇〇三年、

た。

- Booth (2015), p. 230
- 『マロン派年代記』については、Hoyland (1997), pp. 135-139
- 西暦六五九/六〇年、ただし実際には六六一年の出来事
- A. Marsham, Rituals of Islamic Monarchy: Accession and Succession the West-Syrian Chronicles, Liverpool, 1993, pp. 29-35, pp. 31-32; cf Maronite Chronicle, in: A. Palmer (tr.), The Seventh Century in the First Muslim Empire, Edinburgh, 2009, pp. 86-89
- Perspectives, Leiden, 2013, pp. 87-112 (以下、Marsham (2013)と略) in: A. D. Beihammer et al. (eds.), Court Ceremonies and Rituals of pp. 101-103; cf. S. Bashear, "Qibla Musharriqa and early Muslim Power in Byzantium and the Medieval Mediterranean: Comparative Antiquity: The Accession of Mu'awiya in Jerusalem, CA. 661 CE", Marsham, "The Architecture of Allegiance in Early Islamic

- prayer in Churches", The Muslim World 81-3/4 (1991), pp. 267-282 ·ルジューンについては第三章注①参照
- Marsham (2013), pp. 103-105
- prophecy, London, 2016, pp. 39-41 cf. O. Heilo, Eastern Rome and the Rise of Islam: History and
- Booth (2015), p. 135
- 17) Beginnings of Islam, Philadelphia, 2012, pp. 211-213 The Death of a Prophet: The End of Muhammad's Life and the ドナー『イスラームの誕生』一八二―一八三頁。St. J. Shoemaker
- Maronite Chronicle, p. 32

(18)

Australian Byzantine Studies Conference, Canberra, 1981, pp. 43-68 mirrored in Arabic Literature", in: Proceedings of the First "Byzantium and the Arabs: アラブから見たビザンツ帝国の認識については A. M. H. the Image of the Byzantines as Shboul

お わ IJ に

して、ローマ帝国の支配下にあった地域のうち、帝国の領域外に去ったシリア・パレスティナやエジプトにはアラブが 経済力はいまや、勃興したアラブ国家のものとなっていった。ビザンツ帝国は、アラブという自らよりもはるかに強力な 興して、 「他者」との対峙を余儀なくされ、彼らに対抗・併存していくために、さまざまな改革や変化を進めていく。 地中海周辺地域で最強の軍事力を保持する国家でも、 |世紀中盤以降、ビザンツ帝国は古代のローマ帝国のような、地中海周辺地域の大半を支配する国家ではなくなってい 独自の国家と新たな文明を形成していった。かつて、地中海世界でローマ帝国が保持していた圧倒的な軍事力や 地中海周辺地域でもっとも富裕な国家でもなくなっていた。そ 勃

七世紀初頭までとは様相を大きく異にする国家として、「ビザンツ帝国」が出現したということができよう。

敗し、ビザンツ帝国を滅ぼすことができなかった。そして本稿で検討したようにそれが、アラブが独自の文明を展開させ 方アラブは軍事的にも経済的にも圧倒的な力を持つにいたったにもかかわらず、コンスタンティノープルの攻略に失

明を形成していったのである。このような観点から見るとビザンツ帝国とアラブは、敵対と衝突を繰り返し、また相互に

ていった要因でもあった。つまりアラブもまた、ビザンツ帝国という「他者」との対峙を余儀なくされ、新たな国家や文

「他者」と認識してはいるものの、実は同じ土壌から同時期に生まれ成長した、双子のような存在だったとも言える。

長きにわたって対峙を余儀なくされた。ビザンツ帝国が「ローマ帝国」として存続したことは、ビザンツ帝国自身にとっ がビザンツ帝国は「ローマ帝国」として、その後も長く続いていく。そしてイスラーム世界も「ローマ帝国(ルーム)」と、 七世紀中盤以降のビザンツ帝国は、かつてのローマ帝国とはさまざまな点で容貌を異にする国家へと変容していた。 だが「ローマ帝国であること」を受け継ぐことができたのは、強大なアラブではなく、ビザンツ帝国であった。

ても、そしてイスラーム世界にとっても、きわめて大きな意味を持っていたと言わなければならない。

(立命館大学文学部教授)

To Become the 'Heir' of the Roman Empire: Byzantium, Arabs and the Mediterranean in the Seventh Century

by

KOBAYASHI Isao

From the 630's, the Arabs penetrated into the territory of the Byzantine Empire and occupied Syria, Palestine, and Egypt by the 640's. The Arabs also invaded the Sasanian Empire and completely annexed Sasanians in 651/52, and as a result they formed a vast and powerful empire. But the emergence and the expansion of the Arabs had another significance: the Arabs also created new Islamic civilization.

In the first phase of the Arab invasion during the 630's, the Byzantines could not fully understand the Arabs. The Arabs had been called "Sarakenoi (Saracens)" and identified with "Agarenoi (descendants of Hagar)" or "Ishmaelitai (descendants of Ishmael)" from Late Antiquity, but the word Sarakenoi (and also Agarenoi and Ishmaelitai) did not connote any religious meaning. So during the 630's, the Byzantines (and other Christians and Jews) could not understand the Arabs' faith adequately, and often regarded the Arabs as simply pagans. The Byzantines also expected that the Arabs would disappear in a short time. Because the Byzantines bore yet in mind that the Sasanians had invaded and ruled Syria and Egypt during the 610 - 620's but their rule ended abruptly due to the striking victory of Byzantine Emperor Heraclius (r. 610-641) in 628.

However, as the Arab state became stable, and knowledge of the Arabs increased, the Byzantines and Christians outside of the Byzantine Empire gradually understood that the Arab state was much more powerful than the Byzantine Empire, and that the Arabs had been developing their own faith. The first Arab attack against Constantinople in 654 is of particular importance. In 654, after the preparations of a much larger number of troops and an armada, the Arabs penetrated into the Byzantine Empire and quickly reached Constantinople. But the Arab fleets suffered considerable damage as the result of a heavy storm, and their land forces were also forced to withdraw.

This incident is important in two respects. At first, the Byzantines became more conscious of their own weakness and Arab strength. Therefore from the 650's, the Byzantines immediately began the reforms of their defenses and administration to respond to this serious situation.

Secondly, the Arabs had been defeated and withdrew because of the heavy storm. This was interpreted to mean that Byzantium and the Byzantine Emperor had received God's special providence. From the 630's, Emperor Heraclius and his grandson Constans II (r. 641-668/69) had been heavily criticized due to their monenergist and monothelete doctrines, and their critics like Maximus the Confessor asserted that the Arabs' rapid expansion and the defeat of the Byzantines had been caused by the emperor's heretical policy: Maximus and his supporters insisted that the sinful religious policy of Heraclius and Constans II had provoked God's anger. However, the "victory" in 654 proved that not only Constantinople and the Byzantine Empire but also the Emperor had been receiving God's protection. In other words, the "victory" over the Arabs in 654 proved the Emperor's religious doctrine was right.

Confrontation with the Arabs continued from 660's onwards, and the Arabs again intensified their efforts to conquer the Byzantine Empire. But the Byzantines withstood tenaciously and even began to counterattack the Arabs in the 670's. Under such circumstances, the Byzantines further reinforced the belief that the Byzantine Empire and the Emperor received God's Providence. For them, the Roman Empire meant the Christian community ruled by an Emperor for whom God provided divine protection.

On the other hand, the Arabs could not extinguish the Byzantine Empire, and they were forced to coexist with Byzantium over a long period. So, the Arabs could not become the sole 'heirs' of the Roman Empire and Roman civilization, and on account of this, they chose to form their own Islamic civilization from the end of the seventh century.

Key Words; Byzantine Empire, Islam, Constans II, Arabs, Mu'āwiya